

蘇小小像の変遷——六朝詩から唐詩まで

彭 腊 梅

一、はじめに

蘇小小は南齊時代の有名な妓女である。錢塘（杭州）の出身といわれている。彼女の名前は唐代以降多くの文人の作品に取り上げられ、人口に膾炙するようになった。宋代になってもこの状況は変わらなかった。明清以降も、彼女の名前は文人の詩文の中にしばしば出現し、戯曲や伝奇小説の主人公としても取り上げられた。彼女の墓も西湖畔に建てられ、蘇小小と彼女の物語は、西湖の美しい景色とともに、西湖文化に彩りを添え、人々に愛されている¹⁾。

これほど有名な蘇小小ではあるが、実は彼女本人についての歴史資料はほとんどなく、蘇小小という人物が歴史上存在したのかどうかも断定することはできない。そのために、彼女に関する研究は中国、日本ではあまり多くはない²⁾。これから本稿で論じるのも、蘇小小という歴史上の人物ではなく、主にさまざまな文学作品の中に表現されたイメージとしての蘇小小である。それらのイメージの変遷を考察することによって、作者個人の創作意図ばかりでなく、その背景をなす当時の文人達と妓女の関係も明らかになるだろう。

本稿ではその第一段階として、彼女の名前が初めて登場した六朝の『玉台新詠』から唐詩に至る蘇小小のイメージの変遷を辿る。

二、蘇小小の登場——『玉台新詠』

文献上最も早く蘇小小の名前が現れるのは、南朝梁陳の詩人徐陵が編纂した『玉台新詠』の「錢塘蘇小歌一首」においてである³⁾。

妾乘油壁車	妾は油壁車に乗り
郎騎青驄馬	郎は青驄馬に騎る
何処結同心	何れの処にか同心を結ばん
西陵松柏下	西陵 松柏の下

この歌の内容を見ると、作者が自分のことを歌った詩歌と解するのが自然であるが、作者名は『玉台新詠』にも、後にこの歌を収録した『樂府詩集』にも記載がない。蘇小小については当時の資料はなく、ただ中唐の沈建が編纂したといわれる『樂府広題』（現在佚）に「蘇小小は錢塘の名倡なり。蓋し南齊の時の人なり」との記述が最初であるらしい⁴⁾。

作者が蘇小小であるかどうかはさておき、内容からすると、ある人が南朝樂府を学んでつくった作

品ではないかと考えられる。この詩の下二句に「何処結同心、西陵松柏下」とあるが、これは『子夜四時歌・冬歌』中の詩句「何処結同心、西陵柏樹下」と極めてよく似ている⁵⁶。

何処結同心	何れの処にか同心を結ばん
西陵柏樹下	西陵 柏樹の下
晃蕩無四壁	晃蕩として四壁無く
嚴霜凍殺我	嚴霜 我を凍殺す

この詩は男女の会話である。女性が私たちどこで契りを結びましょうかと尋ねると、男性は西陵の柏樹の下で、と答える。すると女性は、柏樹の下は広々して、周りに壁もありません。わたし、きつと寒さで凍え死んでしまいます、と言うのである。

両詩の中の「同心」という言葉は、『玉台新詠』の他の詩でもしばしば見られる。男女が心をひとつにすることを表し、男女が契りを結ぶ或いは結婚する場合によく使われている。小西昇氏は以下のように述べる。

「同心」ということばは、『易、繫辭上』に「二人同心、其利断金」とあって、二人が心を合わせる意味であったが、南朝樂府詩にいたって、ひとつ心の意味として普遍化され、一般化したように思う。同心のひとを得ることはあくまで希求であって、現実のものではなかった。しかし身を売る女であったからこそ、彼女たちは愛において同心をなお追求したともいえる⁵⁷。

南朝樂府詩は遊女娼妓の文学であるといわれるが、『子夜四時歌・冬歌』の女が娼妓であるとすれば、愛する男とひとつ屋根の下で一緒に暮らすことを願いながら、(当時の身分社会においては)実現がかなわないことの悲しみや不安を表現しているといえるだろう。これに対して、『錢塘蘇小歌一首』は自ら積極的に男を誘い、愛情を追求する女性が描かれている。それは「松柏」と「柏樹」の微妙な違いにも表れている。「柏」は日本で言うブナ科の落葉高木である「かしわ」ではなく、ヒノキ科の常緑高木の「このてがしわ」のことであり、秋にも落葉せずそのまま越年する。「松」は日本のマツ属の中でもクロマツ、アカマツを指すことが多い。常緑樹として冬も緑の葉を茂らせることから、節操・誓約などを変えないことと長寿の象徴とされた。「松柏」という言葉は最も早く『論語』に見られるが⁵⁸、常緑樹としての特徴から強韌で変ることのない品性を象徴している。例えば梁武帝は「松柏」で、時が経っても愛情が変わらないことを表す詩句を作っている⁵⁹。

果欲結金蘭	果して金蘭を結ばんと欲せば
但看松柏林	但だ松柏の林を看るのみ
経霜不墜地	霜を経て地に墜ちず
歳寒無異心	歳寒うして異心無し

本当に結婚しようと思うのなら、(私の愛は)ただ松柏を見ればよい。霜を受けても葉は地に落ちないで青々としているし、年の暮れの寒い時分になっても、夏の頃と少しも変わらない。日がたって

も心変わりなどしない。

「西陵の松柏の下で契りを結ぶ」というのは、その松柏がふたりの永遠の愛の証であるという意味も帯びている。このように蘇小小の詩は、一般の南朝楽府詩における女性のイメージとは異なり、自ら積極的に永遠の愛を追い求める独立した女という当時としては斬新な女性像が打ち出されているといえるだろう。

「錢塘蘇小歌」によって歴史の舞台に登場した蘇小小の名前は、これ以後注目を浴びることなく、いつの間にかその舞台から姿を消す。以後二百年近くの間、管見の限りでは、どのような文献にも蘇小小に関する記載は見当たらない。次に彼女の名前が出現するのは、唐代中期である。

三、蘇小小の再発見——唐代

歴史の片隅に埋もれていた蘇小小を見出し、発掘し、育て上げたのは唐代の文人である。少なくとも唐代の文人たちがいなければ、彼女がこれほど脚光を浴びることはなかっただろう。唐代の詩で最も早く彼女の名が現れるのは、韓翃の「送王少府婦杭州」の中である⁹。

婦舟一路転青蘋	婦舟の一路 青蘋を転じて
更欲随潮向富春	更に潮に随って富春に向かわんと欲す
呉郡陸機称地主	呉郡の陸機は地主と称す
錢塘蘇小是郷親	錢塘の蘇小はこれ郷親なり
葛花満把能消酒	葛の花は把に満ちて能く酒を消し
梔子同心好贈人	梔子は心を同じくして人に贈るに好し
早晚重過漁浦宿	早晚 重ねて漁浦 <small>よし</small> に過りて宿らん
遥憐佳句篋中新	遥かに憐れむ佳句の篋中に新たなるを

韓翃、字君平、南陽（今の河南）の人である。生年不詳、卒年は貞元中。詩を善くし、大歴十才子の一人に数えられた。詩題に見られる王少府は宮中の役人で、韓翃と一緒に詩を作る友達であり、杭州の出身である。彼が杭州に帰郷する際、韓翃はこの詩を作って送った。首聯は王少府が杭州へ帰る行程を描いている。船で一路南へ、青蘋の河を経て潮に従って富春（杭州）に到着する。頷聯、頸聯では故郷の特色特産を紹介する。六朝の著名な文学者陸機は呉郡の地主であり、錢塘の名妓蘇小小も同郷人である。酔いざましの葛の花も、二つ枝の同心梔子も杭州の特産である。尾聯は作者の想像で、王少府は今回また必ず漁浦を訪問して宿をとるだろうから、詩が大好きな彼のこと、必ずや新しい詩を作るに違いないと述べている。蘇小小と陸機を同じ地方の有名人として並べているのが興味深い。この詩が書かれた頃、民間においてはすでに彼女の名はある程度知られていたようだ。

また、韓翃に続く比較的早い作品として権徳輿の「蘇小小墓」を挙げてみよう¹⁰。

万古荒墳在	万古の荒墳在り
悠然我独尋	悠然として我独り尋ぬ
寂寥紅粉尽	寂寥として紅粉尽き
冥寞黄泉深	冥寞として黄泉は深し

蔓草映寒水 蔓草は寒水に映じ
 空郊暖夕陰 空郊は夕陰に暖し
 風流有佳句 風流 佳句有り
 吟眺一傷心 吟眺 一たび心を傷ましむ

この詩の首聯は詩人が蘇小小の墓を探すところからはじまり、頷聯、頸聯で引き続き墓の周囲の景色と詩人の感懐が描かれる。一面の寂寞、若くして命を落とし、幽冥たる黄泉の奥に帰る。ただ見えるのは寒水に映る蔓草、夕陽の残照に蔽われる空漠たる郊野。尾聯で詩人は「錢塘蘇小歌」を思い出し、詠いながら辺りを眺め、在りし日の恋する女詩人（「風流有佳句」）に思いを馳せる。

韓翃、権徳輿以降、多くの唐代の文人が蘇小小を作品の中で取り上げた。それらの作品における蘇小小のイメージはおおよそ二つのタイプに分けることができる。ひとつは、(A) 錢塘の名妓、妓女の代表、代名詞としてその名に言及するもの、もうひとつは「錢塘蘇小歌」から出発して、詩人が新たに創作した (B) 恋する女としてのイメージである。それらを表にまとめると次のようになる（二つのイメージが一つの詩に共存する場合もある）。

制作年代	作品名と 蘇小小のイメージ	生卒年	作者
	送王少府帰杭州 (A)	卒於貞元時	韓翃
貞元年間	蘇小小墓 (A) (B)	761-818	権徳輿
長慶三年 (823)	杭州春望 (A) 余杭形勝 (A)	772-849	白居易
長慶四年 (824)	聞歌妓唱巖郎中詩 因以絶句寄之 (A)		
大和三年 (829)	和春深二十首 其二十 (A)		
大和八年 (834)	楊柳枝詞八首 其五、六 (A)		
長慶四年 (824)	送裴処士応制挙詩 (A)	772-842	劉禹錫
長慶三年 (823)	白舍人自杭州 寄新詩 (A)		
大和六年 (832)	楽天寄憶旧游因 作報白君以答 (A)		
不詳	貞娘墓 (A)	772-846	李紳
不詳	送客游呉 (A)	780-855	殷堯藩
元和二年 (807) 頃	蘇小小歌 (B)	791-818	李賀
不詳	七夕 (B)		
不詳	題蘇小小墓 (B)	792-853	張祐
不詳	蘇小小歌 (B)		
不詳	悲呉王城 (A)	803-853	杜牧
大和九年 (835)	自宣城赴官上京 (A)		

不詳	錢塘対酒曲 (A)	803-879	陳陶
大中四年 (850)	汴上送李郢之蘇州 (B)	813-858	李商隱
不詳	蘇小小歌 (B) (A)	812-866	温庭筠
不詳	七夕 (B) (A)		
不詳	春洲曲 (A)		
不詳	春暮宴罷寄宋寿 先輩 (A)		
大中四年 (850)	楊柳八首其三 (B)		
不詳	蘇小小墓 (A)	833-909	羅隱
中和二年 (878) 頃	比紅兒詩百首 (A) (B)	与羅隱同時人	羅虬
不詳	寄蔣先輩 (A)	840-911	黄滔
不詳	柳枝詞五首其二 (B)	850-920	牛嶠

唐代の文人にとって蘇小小はどのような存在だったのか。更に作品についてタイプ別に詳しく見てみよう。

四、唐詩における蘇小小のイメージ

(A) 錢塘の名妓・妓女の代表として

五十一歳のとき杭州刺史に任ぜられた白居易 (772~846) は、その間多くの詩の中に蘇小小の名を詠ったが、明らかに彼女を錢塘妓女の代表と見なしている。「杭州春望」を見てみよう⁹⁴。

望海樓明照曙霞	望海樓 明らかにして 曙霞を照らし
護江堤白踏晴沙	護江堤 白くして 晴沙を踏む
濤声夜入伍員廟	濤声 夜に入る 伍員の廟
柳色春藏蘇小家	柳色 春に藏す 蘇小の家
紅袖織綾誇柿蒂	紅袖 綾を織りて 柿蒂を誇り
青旗沽酒趁梨花	青旗 酒を沽りて 梨花を趁う
誰開湖寺西南路	誰か開く 湖寺西南の路
草緑裙腰一道斜	草緑に 裙腰一道斜めなり

望海樓は明るく朝焼けに照らされ、錢塘江の堤の砂は白く、晴れた日のもとその砂を踏んで散歩する。夜には伍員廟の御廟に波の音が響いてくるし、春の柳は蘇小小の家をこんもりとおおう。赤い袖の娘たちは柿蒂花の織物が自慢、青いのぼりの酒屋では梨花春がよく売れる。孤山寺の西南の路は誰が開いたのだろう、草の緑がスカートのように一すじ斜めに続いて、何ともいえない。「望海樓」は、自注に「城東の樓を望海樓と名づく」とあり、当時杭州の街の東から、有名な「浙江の潮」(錢塘江の逆流現象。中秋の満月のころに起こる)が望まれたらしい。「伍員廟」は、春秋の末に呉に仕えた

伍子胥を祭った祠廟。「蘇小家」は蘇小小の名を使い、当時の妓楼を表す。「柿蒂」は織物の名。「梨花」梨花春という酒の銘柄。杭州の名所名産を総ざらいにしたようなこの詩の中で、伍子胥の廟と並んで蘇小小の家（妓楼）が挙げられている。

これを受けて劉禹錫は唱和する詩を作った。「白舎人杭州より新詩を寄す、「柳色は春に蘇小の家を歳す」の句有り、因って戯れに酬い、兼ねて浙東の元相公に寄す」である¹²。

錢塘山水有奇声	錢塘の山水 奇声有り
覽謫仙官守百城	覽く仙官より謫せられ 百城を守る
女妓還聞名小小	女妓 還た小小と名づくるを聞く
使君誰許喚卿卿	使君 誰か卿卿と喚ばるるを許す
鼃驚震海風雷起	鼃 驚いて海を震わせば 風雷起り
蜃闔嘘天樓閣成	蜃 闔いて天に嘘ぶけば 樓閣成る
莫道騷人在三楚	道う莫れ 騷人は三楚に在りと
文星今向斗牛明	文星 今斗牛に向かいて明らかなり

錢塘の山水といえば美しいことで有名であり、君は暫くの間、仙官から左遷されてその地を治めている。その上優れた妓女も居て「小小」などという名の妓がいるとか。君は刺史の身分でありながら、その妓に「お前さん」なんて呼ばせていることだろう。大亀が驚いて海をかき回せば嵐が起るし、大はまぐりが勝敗を争って天に気を吐けば樓閣が出現する。詩人は楚に居るなどといったはならない。文学を司る文昌星は今、斗牛星（地上の揚州・呉越を支配する）で輝いているのだから。この詩では、小小が錢塘妓女の代名詞になっている。

同じ頃、白居易は杭州で「余杭形勝」を作っている¹³。

余杭形勝四方無	余杭の形勝 四方に無く
州傍青山県枕湖	州は青山に傍い県は湖を枕とす
遠郭荷花三十里	郭を遠る荷花 三十里
弘城松樹一千株	城を弘う松樹 一千株
夢児亭古伝名謝	夢児亭は 古より伝えて謝を名とし
教妓楼新道姓蘇	教妓楼は 新たに道いて蘇を姓とす
独有使君年太老	独り使君の 年ただ老い
風光不称白髭鬚	風光 白髭鬚に称わざる有り

この詩には次のような自注が附せられている。「州西靈隱山上有夢謝亭、即是杜明浦夢謝靈運之所、因名客児也。蘇小小、本錢塘妓人也。」（州西の靈隱山に夢謝亭有り。即ち是れ杜明浦の謝靈運を夢むの所にして、因って客児と名づくるなり。蘇小小は本と錢塘の妓人なり。）

この詩は、首聯で杭州のような景勝地は、天下のどこにも無く、州庁は青山の麓にあり、県庁は西湖に臨むということ述べ、頷聯、頸聯で杭州の名所旧跡を紹介する。城郭の周囲には三十里に蓮の花が咲き、城壁すれすれに松の樹が一千株も並んでいる。古くは劉宋の杜明浦が謝靈運を夢みたとい

う亭は謝という名をつけて夢謝亭といい、近くは教妓楼という妓楼は蘇を姓とする。ここでもまた白居易は蘇小小の名を錢塘（杭州）妓女の代名詞として使い、さらに教妓楼と夢児亭を並べて、杭州文化の特色として紹介している。

次に、殷堯藩の「客の呉に遊ぶを送る」を見てみよう¹⁾。

呉国水中央	呉国 水の中央
波濤白渺茫	波濤 白く渺茫たり
衣逢梅雨漬	衣は梅雨に逢って漬す
船入稲花香	船は稲花に入り香し
海戍通塩竈	海戍は塩竈に通じ
山村帶蜜房	山村は蜜房を帯ぶ
欲知蘇小小	蘇小小を知らんと欲し
君試到錢塘	君は試みに錢塘に到らん

殷堯藩（780～855）は嘉興の人。唐元和九年（814）進士、永樂県令、福州従事を歴任、かつて李翱のもとで潭州幕府の幕僚をつとめ、後に侍御史に至る。沈亜之、姚合、雍陶、許渾、馬戴は詩友であり、白居易、李紳、劉禹錫等とも交流があった。呉は江南地方を指している。江南出身の殷堯藩は客に江南の風景や産物を紹介するとき、特に蘇小小の名を挙げている。錢塘湖（西湖）で錢塘妓女と舟遊びをするのも、江南特有の風情なのであろう。

過去の名妓の代表、先駆者として蘇小小は、しばしば当時の名妓と比べられた。たとえば、唐代、呉に真娘という有名な妓女がいて、蘇小小と並び称された。李紳「真娘墓」詩序に「呉の妓人にして歌舞に名あるものなり。死して呉の武丘寺の前に葬らる。呉中の少年、其の志に従うなり。墓には花多く、以って其の上に満つ。嘉興県の前また呉の妓人蘇小小の墓あり。風雨の夕べ、或いはその上に歌吹する音有るを聞く。」とある²⁾。范攄の「雲溪友議」の中にも同じような記載がある³⁾。

また『唐才子伝』と『唐詩記事』に次のような話が載せられている。雕陰に羅虬という官吏がいたが、ある宴席で妓女杜紅兒を見初め、惚れこみ、贈り物をしようとした。ところが、彼女の主人がそれを知って受けとらせなかった。逆上した羅虬は彼女を切り殺してしまった。そのあと後悔したのか、古の美女を選んで絶句百首を作り、紅兒に比した⁴⁾。その第五十五首は蘇小小を取り上げている⁵⁾。

蘇小空匀一面妝	蘇小は空しく一面の妝を匀す
便留名字在錢塘	便ち錢塘に名字を留め
藏鴉門外諸年少	藏鴉門外 諸年少
不識紅兒未是狂	紅兒を識らざれば いまだこれ狂ならず

蘇小小が亡くなって、彼女の美貌は消えたが、彼女の名前は錢塘で広く語り伝えられている。妓楼に遊びに来る若者よ、紅兒を知ることがなければ正気のままだが、いったん紅兒を知れば、彼女に魅入られ理性を失うことになるぞ。

蘇小小の名は、単に錢塘の名妓、杭州の有名人として取り上げられるだけでなく、詩人が詩の中で

妓女の様々な姿を表現する際にも使われた。白居易の「楊柳枝詞」の其の五と其の六を見てみよう⁹⁾。

蘇州楊柳任君誇	蘇州の楊柳 君に任せて誇る
更有錢塘勝館娃	更に錢塘有り 館娃より勝る
若解多情尋小小	若し多情を解せば 小小を尋ねよ
綠楊深處是蘇家	綠楊の深き處 是れ 蘇家なり

蘇州の楊柳（妓女）のすばらしさは、あなたの言うとおりでらう。でも更にまた錢塘（の蘇小小）が館娃宮（の西施）より勝っているところがある。もし彼女らがどれほど情に厚いか知りたいなら、蘇小小をたずねるがよい。あの綠柳が深く繁っているところが、蘇小小の家（妓楼）だ。

蘇家小女旧知名	蘇家の小女 旧 名を知らる
楊柳風前別有情	楊柳風前 別に情あり
剥条盤作銀環様	条を剥ぎ 盤めて 銀環の様を作し
卷葉吹為玉笛声	葉を巻きて 吹きて 玉笛の声を為す

蘇家の女の子のことは、昔からずっと知られている。微風になびく楊柳の如くなよなよとして、柳の枝の皮を剥いて輪に巻いて銀の腕輪のように作り、柳の葉を巻いて玉笛の音を出す。中国の柳は、詩文の中では、離別の情を表すのが一般的だが、ここでは、春風になびく、さわやかなイメージから、たおやかな蘇小小の姿を浮き上がらせる。

同じく白居易の「和春深二十首」其の二十に次のようにある⁹⁾。

何処春深好	何れの処か 春深くして好き、
春深妓女家	春深し 妓女の家
眉欺楊柳葉	眉は 楊柳の葉を欺き、
裙妬石榴花	裙は 石榴の花を妬む
蘭麝熏行被	蘭麝 行被に熏じ
金銅釘坐車	金銅 坐車に釘す
杭州蘇小小	杭州の蘇小小
人道最天斜	人は道う 最も天斜と

これは二十首で一組となる詩であり、白居易が大和三年（829）蘇州から長安に帰った後に作られた。元稹の「春深」詩に和韻した作品である。二十種類の場面の春の光景を描き分けたもので、順番に、富貴家、貧賤家、執政家、方鎮家、刺史家、学士家、女学家、御史家、選客家、経業家、隠士家、漁父家、潮戸家、痛飲家、上巳家、寒食家、博奕家、嫁女家、娶婦家、最後に妓女家である。この二十種類の家は貴賤高低の別ではなく、社会を構成する様々な層を代表するものとして選ばれている。白居易は、妓女の柳の葉のような眉、紅いもすそ、蘭麝香がかおる着物、豪華な車などを描いた後、蘇小小の名を挙げて、彼女らこそがもっとも艶やかだといっている。

以上（A）タイプの詩においては、蘇小小の名は、彼女個人というよりも、錢塘名妓としての名声に焦点が当てられ、妓女の代表、代名詞的存在として言及、使用されている。それは当時の妓女と文人との交流が変わったことと関係がある。

中国における妓女は大きく三つの種類に分けることができる。家妓、宮妓、官妓である。家妓は貴族や官僚の家に属する妓女で、歌舞などの芸をもって主人の娯楽や鑑賞に供されていた。同時に性の対象であったことは言うまでもない。主人の私有財産であり、表面上は裕福な生活をしていても、奴隷と同じく自由はなかった。宮妓は、専門に宮廷に奉仕する女芸人（芸妓）のことである。基本的に芸を供するのであり、身を供するのではないとされていた。宮廷の外に住むものもいて、生活は比較的自由であったが、皇室の財産であることには変わりがない。官妓は府や州の管轄下におかれた妓女で、主に地方官僚やその土地の有力者の享楽に供せられた。長安や洛陽といった大都市の色街では、運営は個々の妓楼で行われていたにしても、妓女たちは原則として教坊の管轄下に置かれていたので、官妓に分類される。官庁が挙げる祝典や宴会、客の接待などに派遣され、芸を披露したり、酒席の接待、夜の相手などさせたりした。また官吏が外出して遊ぶ際に同行することもあった。

王書奴氏は「中国娼妓史」で、家妓を養うことが大貴族の流行であったことから、魏晉南北朝時期を「家妓の時代」と呼び、それに対して唐代を「官妓全盛の時代」と呼んでいる。もちろん官妓は昔からあったが、各州各郡の官庁に登録されて制度的に整備され、一つの階層を形成するほど大量に社会に存在していたのは、唐代であった。それに応じて唐代は文化的な教養が高い妓女も多く、たとえば『全唐詩』中詩文を残した妓女は三十三名に及んでいる。「詩のわかる妓女は唐がもっとも多い。唐代の妓女は、詩を作り、詩を詠い、詩を解するために、中唐以降の新文体辞の産出に大いに力があつた。」と王氏は指摘している²¹。これは唐代の社会において妓女に求める役割に変化が生じたことによる。齋藤茂氏はこのような唐代妓女の役割の変化を、「技芸」と「性」という本来的な役割に、新たに「才知」が加わったのだと説明する。

唐代には詩文を解し、話術で座客を楽しませる妓女が高い評価を受けるようになっていた。（中略）このように妓女の才知が目されるようになったのも、結局はその享受者の側に大きな変化があったからであろう。官僚として、文学者として、時代の新しい担い手となった士大夫たちは、早くは科擧の受験時や合格の祝宴において、また下級官や地方官に就いてからも、しばしば妓女との接触の機会を持ち、これと親しんだ。士大夫と妓女との距離が、前代よりも明らかに接近したのである。……その結果、性的な交流の相手として、また技芸の持ち主としてのみならず、才知という精神的な面を兼ね備えた女性として、妓女を遇することが可能になったのだと思われる²²。

士大夫と妓女の距離が接近したとあるが、この妓女は官妓のことである。なぜなら家妓はもっと近い存在だからである。ここでいわれているのは、遊里や宴席のような社交の空間で妓女との交流のあり方が変化したということである。

唐代文人と妓女の交流の痕跡は多くの詩歌の中に残されている。鄭志敏氏によると、『全唐詩』の詩題の中に倡（娼）あるいは妓の字が現れる詩は二百八十五首、詩句のなかに倡（娼）あるいは妓の字が現れる詩は二百八十六首ある。さらにこれらの詩歌を詳細に見てみると、唐代文人と妓女の交流

のあり方について、安史の乱以前と以後とで違いがあると言う。以前は文人にとって、妓女は娯楽の道具であり、宴席でその歌舞を楽しんだり、酒の相手となればよく、出仕がうまくいかないときの憂さ晴らしの対象であったが、以後はむしろ、順風満帆なときにその喜びを分かち合う相手が妓女であり、そこには「観妓」ととどまらない感情的な深い交流があったと言う²¹。

そこまで細かく分かれるかどうかは別にして、この違いは、齋藤茂氏のいう享受者の側である士大夫（文人）における大きな変化に関係していると思われる。唐前期において科挙はまだ実質的に機能しておらず、進士になるのも貴族関係で、まだ六朝からの旧貴族制度を引きずっていた。中期以降になって、自らの学問と才能によって出仕する新しい階級としての士大夫たちが続々と出現してくる。彼らが妓女と対するときの振る舞いは、旧貴族とは当然異なるであろう。過度に図式的であることを承知であえて対比すれば、王書奴氏のいう「家妓の時代」における貴族にとって、妓女は所有物であり、鑑賞の対象、性の対象であり、一言でいえば慰み物に過ぎなかった。唐前期を過渡期として中唐以降の「官妓全盛の時代」の新しい士大夫階級にとって、妓女は相互交流の相手、文学上の同志であった（もちろんこれは一部の妓女で大部分は「慰み物」として悲惨な境遇にあったことはいうまでもない）。鄭志敏氏によればこの時期（中唐）、妓女に贈ったり、妓女を追想したりする詩が大幅に増え、中唐士人が妓女を書く際の主要なテーマとなった。詩人と妓女の交わりも前期のよそよそしい付きあいから精神的な交流にまで発展した。その目的は精神的な慰めと解放を得ることであり、一人の妓女を独占しようというものではなかった。当時、民妓官妓を問わず、多才で交際範囲の広い妓女は、しばしば十八世紀ヨーロッパでいう社交界の花形のような位置を占めていた²²。

このように中唐以降、文人と妓女との関係は歴史上あまり見られないほど対等であったといつてよい。このような背景の下で妓女が詩作の題材として取り上げられるようになり、蘇小小の名が文化妓女の先駆者のひとりとして扱われたわけである。

（B）恋する女として

今まで述べた名妓のイメージとは別に、彼女の最初の詩「錢塘蘇小歌」から直接想像を膨らませ、恋する女のイメージを蘇小小に託して詠う詩も多く現れた。もっとも有名な詩は李賀の「蘇小小歌」（或いは「蘇小小墓」に作る）である²³。

幽蘭露	幽蘭の露
如啼眼	啼ける眼の如し
無物結同心	物の同心を結ぶ無く
煙花不堪剪	煙火は剪るに堪えず
草如茵	草は茵の如く
松如蓋	松は蓋の如し
風為裳	風は裳と為り
水為珮	水は珮と為る
油壁車	油壁車して
久相待	久しく相待つ

冷翠燭	冷やかなる翠燭
勞光彩	光彩を勞す
西陵下	西陵の下
風雨晦	風雨 晦し

幽蘭の露は涙を浮かべた彼女の目のよう。契りを結ぶよすがもなく、霞んだ花は贈ろうにも切る事ができない。緑の草は敷物、墓にかぶさる高い松は車のほろのよう。彼女の魂はまだ生きているかのように、吹く風は衣ずれの音をたて、流れる川は佩び玉の音を響かせる。蘇小小は油壁車に乗って、西湖をめぐり、夜は西湖の橋のたもとで恋人を待つ。青白くゆらゆらと今にも消えんとする鬼火のように、暗い風雨の吹きすさぶ中、いつまでもいつまでも待ち続ける。

李賀は「錢塘蘇小歌」から「油壁車」、「結同心」、「西陵」などの語句を流用し、蘇小小の新たなイメージを創作している。李賀が描くところの蘇小小は、死んで亡霊になり、風雨の中、もはや永久に会う術もない逢引の相手をひたすら待ち続ける。この美しくも哀しい亡霊のイメージは、多くの文人の共感を呼んだ。張祐（792～852）もそのひとりである。

『唐才子伝』巻六によると、張祐は姑蘇（江蘇省蘇州専区呉県）に來寓し、志行を守り仕進を求めぬ生活を楽しんで、処士と自称していた。（淮南に來寓した）頃ちょうど杜牧が度支使となっていて、これを厚く遇した。張祐は生來山水を愛し、名寺を多く遊歴した。杭州の靈隱・天竺、蘇州の靈岩・楞伽、常州の恵山・善権、潤州の甘露・招隱などの各寺の題詠は、みな優れたものである。彼は気ままに自由を楽しみ、ときには輿に乗じて北里にくりこみ、つねに妓楼に詩を題した。もし彼がその楼を登めると評判がにわかにあがり、そしると車馬はぱったりと跡を絶ったという。晩年には白楽天と日々相い聚って譙飲談詠したという³。この張祐に「題蘇小小墓」という詩がある⁴。

漠漠窮塵地	漠漠たり 窮塵の地
蕭蕭古樹林	蕭蕭たり 古樹の林
臉濃花自發	臉 濃やかにして 花 自ら發き
眉恨柳長深	眉は恨めしげに 柳は長 ^{とこし} へに深し
夜月人何待	夜月 人何をか待つ
春風鳥為吟	春風 鳥 為に吟ず
不知誰共穴	知らず 誰と共に穴するや
徒願結同心	徒に願ふ 同心を結ぶを

蘇小小の墓地は寂れた荒地で、木々がカサカサと鳴る。彼女の花の顔容に墓地も自然に花を咲かせる。眉を擧げて別れを恨み、墓上の柳も高く茂る。月夜に彼女は誰を待つか？年々春風と鳥が彼女に歌ってくれるが、墓の中の彼女は独りぼっち、いたずらに再会の願いを抱いて待つだけ。

恋する女の願いはここでも成就することがない。張祐には、ほかにも「蘇小小歌」と題する詩が三首ある⁵。

其一

車輪不可遮 車輪 遮るべからず
 馬足不可絆 馬足 絆ぐべからず
 長怨十字街 長に怨む 十字の街
 使郎心四散 郎の心をして 四に散ぜしむるを

其二

新人千里去 新人は千里に去り
 故人千里来 故人は千里より来る
 剪刀横眼底 剪刀 眼底に横たわり
 方覚涙難裁 方に覚ゆ 涙の裁ち難きを

其三

登山不愁峻 山に登るも峻しきを愁えず
 涉海不愁深 海を渉るも深きを愁えず
 中攀庭前棗 庭前の棗を中ち攀^{ひら}き
 教郎見赤心 郎をして 赤心を見せしめん

この詩には自分の恋がかなえられない悔しさと悲しさ、それを乗り越えて前に進もうという決心が描かれている。其一の「長怨十字街」、其二の「剪刀横眼底、方覚涙難裁」は蘇小小の無念の思いを表している。其三の「山に登るも峻しきを愁えず、海を渉るも深きを愁えず」という句は、いかなる困難や障害も恐れず、真実の愛を追い求めるという蘇小小の決心を表している。庭園前に植えられた棗の実を開くというのは、蘇小小の恋人に捧げる一途で誠実な心に喩えているのだろう。「見赤心」が「結同心」を元にして言っているのは言うまでもない。

困難にめげず、自らの愛情を追い求める女というイメージにとって、「七夕」は格好の題材を提供する。李賀「七夕」を挙げよう⁹⁹。

別浦今朝暗 別浦 今朝より暗し
 羅帷午夜愁 羅帷 午夜愁う
 鵲辞穿線月 鵲は辞す 線を穿つ月
 花入曝衣楼 花は入る 衣を曝す楼
 天上分金鏡 天上に 金鏡分かる
 人間望玉鉤 人間 玉鉤を望む
 錢塘蘇小小 錢塘の蘇小小
 更值一年秋 更に値う 一年の秋に

七夕の日、あなたと別れた水辺は朝から薄暗い。夜もふけて、帳の中で訪ね来ぬあなたを思って、悲しみにくれる。針穴に五色の糸を通すのを照らしていた月に、鵲たちは別れを告げに帰っていく。

昼間、衣服を日に曝した高樓の中へ、花びらが飛んでいく。天の上では、黄金の鏡を真二つに割り、それを地上の者たちは、玉でできた鈎のようだと眺めている。わたくし錢塘の蘇小小は、あれからまた一年経ち七夕を迎えました。

続いて温庭筠「七夕」を取り上げる³⁰。

鵲歸燕去兩悠悠	鵲歸り燕去り 両つながら悠悠たり
青瑣西南月似鈎	青瑣 西南 月は鈎に似たり
天上歲時星右轉	天上 歳時 星右に転じ
世間離別水東流	世間の離別 水東に流る
金風入樹千門夜	金風 樹に入る 千門の夜
銀漢橫空万象秋	銀漢 空に横たわる 万象の秋
蘇小橫塘通桂楫	蘇小 横塘 桂楫を通じ
未応清淺隔牽牛	未だ応せず 清淺 牽牛を隔つるに

橋を架ける燕もカササギも帰り、織姫と彦星も互いに別れを告げた。月は鈎のように西南の宮殿を照らす。時間は星々の動きに随って一日一日と過ぎて行くが、別れた人は水が東に流れていくように帰ってこない。秋風は宮殿の門の樹を吹き過ぎ、銀河が空に架かって、秋の美しい景色を彩っている。蘇小小は銀河が彦星を隔てているにもかかわらず、自分で舟をこいで横塘を渡り、恋人に会おうとする。

いうまでもなく、恋する女にとって大事なものは、お金より愛情である。牛嶠「柳枝詞」を挙げよう³¹。

吳王宮裏色偏深	吳王の宮裏 色は偏えに深く
一簇織条万鏤金	一簇の織条は 万鏤金なり
不慣錢塘蘇小小	慣らず 錢塘の蘇小小
引郎枝下結同心	郎を引いて枝下に同心を結ぶ

吳宮の美女は艶麗で万金に値する。ただ錢塘の蘇小小だけが金銭よりも愛情を取り、男を誘っていそいそと松の下で逢引をする。

しかし、当時の社会状況においては、妓女の恋が結婚という形で成就することはほとんどなかった。温庭筠の「蘇小小歌」を見てみよう³²。

買蓮莫破券	蓮を買うに券を破る莫く
買酒莫解金	酒を買うに金を解く莫し
酒裏春容抱離恨	酒裏の春容は離恨を抱く
水中蓮子懷芳心	水中の蓮子は芳心を懐く
吳宮女兒腰似束	吳宮の女兒は 腰束に似たり
家在錢唐小江曲	家 錢塘の小江の曲に在り

一白檀郎逐便風　一たび 檀郎 便風を逐いしより
 門前春水年年緑　門前の春水 年年 緑なり

「蓮やお酒を買うのにお金はいらぬ」というのは、眞の情愛にはお金は介在しないと意味である。しかし結局はつらい別れが待っている。銭塘の女子蘇小小は男が去っても気にせず、その美しさは変わることなく、依然として楽しい日々を過ごしている。ここには当時の文人の妓女に対するある種の理想像（あえて言えば、文人にとって都合のいいイメージ）が投影されている。

以上、Bタイプの詩を見てきた、それでは二つのタイプの詩はなぜ生まれたのであろうか。唐代になって、男女の恋を描いた物語が数多く出現したが、その中の少なからぬ作品に妓女と文人が登場する。張競氏は、中国文化において「恋」はおおよそ三つのパターンに分けられるという。一つは夫婦の間の「恋」、もう一つは未婚男女の間の恋、三つ目は遊女（妓女）との恋であるが、そのうち「未婚男女の間の恋と遊女の恋を、事件の推移の中で人物の心理変化を追いながら描写したのは唐代小説がはじめてである。この意味では恋は唐代において発見されたともいえる。」「その発生過程からみると、遊女の恋がよりはやく意識されたと考えられる。つまり、儀式的な性格を持つ恋は最初は遊女との交際の中で発見され、また、恋の方法や恋の段取りなども遊女の過程において形成されたと考えられることができる。」と述べている²⁵。妓女の恋をテーマとするのは民歌的な特徴を有する南朝樂府詩にはよく見られたが、文人の作品にはあまり登場しなかった。それは儒教理念を規範とした中国古代社会では、男女が自由に交際することは禁止されており、婚姻は父母に決められるものであったからである。夫婦間の愛情は定めた関係の上で育まれるものであった。それ故、妓女との恋愛は文人達の文学的な題材とはなりにくかったのである。

しかし、(A)タイプの考察で述べたように、中唐以降、妓女と文人たちの詩文を通じた精神的な交流が日常化されることになった。その妓女と日常的な交流のなかで、文人達は妓女との恋を体験したと思われる。そのことが妓女との恋愛を文学的題材として取り上げさせることとなり、文人が妓女へ愛情を表した詩や、妓女との恋愛体験を取り込んだ伝奇小説を生み出すに至ったのである。今残っている「崔小玉伝」や「李娃伝」などはその時代に応じた作品である。このような妓女との恋を描いた物語はだいたい純情な妓女を主人公とする。彼女らは恋人を愛し、死んでも心変わりしない。ここで文人と妓女との交際は一種の遊びだけではなく、本当の感情を込めているとも考えられる。

このような妓女との恋愛を文学題材としうる流れの中で、『玉台新詠』の時点で既に「愛を追い求める女性」というイメージを持っていた蘇小小が唐代の文人達に注目され、そのイメージを増幅させていったのではないだろうか。

五、結論

唐代においては、ほかにも有名な妓女・女詩人として薛濤、魚玄機、李冶、劉彩春などがおり、その生涯はよく知られている。蘇小小と同時代でも名妓、美女として知られる緑珠、碧玉、桃葉などがある。彼女らの名前は史書に記載があり、『玉台新詠』の中でも多くの詩に詠われている。蘇小小と他の名妓との違いはここにある。つまり蘇小小の場合、彼女自身が作者ともわからない短い詩一首と「銭塘の名妓だった」という記述があるだけで、歴史的事実がほとんどない。彼女にまつわる経歴や人物像に関するこの空白こそが、民間において彼女の伝説化を促し、文人たちの彼女に対する文学的

想像力を掻き立てたのだと考えられる。

本稿では唐代における蘇小小のイメージがおおよそ二つのタイプに分かれることを見てきた。ひとつは杭州西湖を彩る名所や特産品と並ぶ有名人、錢塘妓女の代表としてのイメージであり、もうひとつは「錢塘蘇小歌」から出発して、文学的に想像、創作された、恋する女のイメージである。そこには唐代における文人と妓女の関係の変化が反映されている。宋代以降もこの二つのイメージは受け継がれ発展していくことになるが、そこでも各時代における文人と妓女の交流のあり方が影を落としていよう。これらについては今後の研究に期したい。

注

- ① 唐の陸広微が編纂した『輿地記』に「嘉興県の前に晋の妓錢唐蘇小小の墓有り」と記されている。また、宋の呉自牧が彼の『夢粱録』巻十五に「蘇小小墓 西湖に在り、上に詩題有りて云ふ、『湖堤歩遊客の句、此即ち題蘇氏の墓に題するなり』と。」と書いている。清の沈復によると、明代の画家徐渭（一五二一～一五九三）が訪れたときはまだ完成していなかったという。乾隆帝が一七八〇年に南巡したとき、蘇小小の墓にも行ったが、そのとき墓は黄土を盛って固めた小山に過ぎなかった。一七八四年乾隆帝が再度南巡したとき、墓はすでに八角形の石造りで、石碑の上に「錢塘蘇小小之墓」と刻まれていた。現在、見ることができる蘇小小の墓は後に六角形の屋根をつけた東屋に改築され、「墓才亭」と呼ばれている。清の特鑑堂將軍が作ったもので、墓才とは彼女の才能を敬慕するという意味である。文化大革命前夜の一九六四年、墓は紅衛兵によって破壊された。その後幾多の修復を経て、二〇〇四年に杭州市政府によって元通りに再建された。
- ② 蘇小小に関連する論文は非常に少なく、管見の限りでは以下の通り。
山崎みどり「李賀『蘇小小歌』について」（『中国文学研究』早稲田大学中国文学会 1990、12 ページ93-104）
趙峻「在りし日の歌—『蘇小小歌』と『含羞』をめぐって」（『中原中也研究』第七号）
- ③（陳）徐陵編（清）呉兆宜注『玉台新詠箋注』巻十 中華書局 2004年重印。
- ④（宋）郭茂倩『樂府詩集』巻八十五（中華書局1979年）に「樂府広題」を引用している。「蘇小小錢塘名倡也。蓋南齊時人。西陵在錢塘江之西、歌曰『西陵松柏下』是也。」
- ⑤（宋）郭茂倩『樂府詩集』巻四十四「子夜四時歌」七十五首 中華書局 1979年。
- ⑥「南朝樂府詩と遊女娼妓の世界」（『日加田誠博士古稀記念・中国文學論集』龍溪書舎 1974年）
- ⑦「論語」「子罕」篇に「子曰、歳寒、然後知松柏之後凋也。」（子曰わく、歳寒くして、然る後に松柏の凋むに後るることを知る。）
- ⑧ 梁武帝「冬歌四首」 郭茂倩『樂府詩集』巻四十四 中華書局 1979年。
- ⑨『全唐詩』巻二百四十五 台湾宏業書局 中華民國六十六年。
- ⑩『權德輿詩文集』巻七 上海古籍出版社 中国古典文学叢書 2008年。
- ⑪『白居易集箋校』巻二十 上海古籍出版社 中国古典文学叢書 1988年。
- ⑫『全唐詩』巻四百九十二 台湾宏業書局 中華民國六十六年。
- ⑬『白居易集箋校』巻二十 上海古籍出版社 中国古典文学叢書 1988年。
- ⑭『文苑英華』巻三百七十八 中央研究院歷史語言研究所 2008年。
- ⑮『沈下賢集 追昔遊集』巻下 上海古籍出版社 四庫唐人文集叢刊影印本 1994年。
- ⑯（唐）范攄『雲溪友議』巻六（四庫全書データベース）に「真娘者、吳国之佳人也。時人比於錢塘蘇小小。死葬吳宮之側、行客慕其華麗、競為詩題於墓樹。」（真娘は、吳国の佳人なり。時人 蘇小小に比

す。死して呉宮の側に葬らる。行客 その華麗に感じ、競いて詩題を墓樹に為す。)とある。

- ⑰『唐才子伝校箋』巻九(中華書局 1990年)に以下のようにある。「虬詞藻富瞻、与族人隠、鄴齊名、咸通間称三羅。氣宇終不逮。広明庚子乱後、去從鄆州李孝恭為從事。虬狂蕩無檢束、時雖陰籍中有妓杜紅兒、善歌舞、姿色殊絶、嘗為副戎属意。会副戎聘隣道、虬久慕之、至是請紅兒歌、贈以綵綵。孝恭以為副戎所貯、從事則非礼、勿令受覬。不称意、怒扞衣起、詰旦、手刃殺之。孝恭以虬激己、坐之。頃会赦、虬追其冤、於是取古之美女有姿艶才德者、作絶句一百首、以比紅兒、当時盛伝。」(虬は詞藻 富瞻にして、族人の隠、鄴と名を齊しくし、咸通の間に三羅と称せらるるも、氣宇 終に逮ばず。広明庚子乱の後に、去りて鄆州の李孝恭に従いて従事と為る。虬 狂蕩にして檢束なし、時に雖陰の籍中に妓の杜紅兒有り、善く歌舞し、姿色殊絶なり。嘗て副戎の属意と為る。会たま副戎 隣道に聘す、虬久く之を慕う、是に至りて紅兒の歌を請い、贈るに綵綵を以てす。孝恭 副戎の貯うる所と為り、従事なれば、則ち礼に非ざるを以て覬を受けしむる勿れ、と。虬意に称わず、怒りて扞衣して起つ、詰旦刃を手にして之を殺す。孝恭虬の己に激せしを以て、之を坐せしむ。頃くして赦に会う。虬其の冤を追う。是に於いて古の美女の姿艶才徳有る者を取り、絶句一百首を作り、以て紅兒に比す、當時に盛に伝う。)
- ⑱『唐詩紀事箋校』巻六十九(中華書局 2007年)に以下のようにある。「詩序、比紅者、為離陰官妓杜紅兒作也。美貌年少、機智慧悟、不与群輩妓女等。余知紅者。乃捫古之美色灼然于史伝三数十輩、優劣于章句間、遂題『比紅詩』。」(詩序に、比紅なる者は、離陰の官妓杜紅兒の為に作るなり。美貌の年少、機智ありて慧悟、群輩妓女等と与にせず。余は紅を知る者なり。古の美色を捫んで史伝の三数十輩より灼然とす。章句の間に優劣あり、遂に『比紅詩』と題す。)
- ⑲『白居易集箋校』巻三十一 上海古籍出版社 中国古典文学叢書 1988年。
- ⑳『白居易集箋校』巻二十六 上海古籍出版社 中国古典文学叢書 1988年。
- ㉑ 王書奴編『中国娼妓史』(岳麓書社 1998年近代名籍重刊)に以下のようにある。「娼妓能詩的、亦以唐代為最多。(中略)唐代娼妓、因其能做詩、能誦詩、能解詩的緣故、中唐以後新文体辞的產生、妓女有絶大功勞。」
- ㉒ 齋藤茂『妓女と中国文人』 東方書店 2000年 ページ128-129。
- ㉓㉔ 鄭志敏『細説唐妓』(文津出版社 1998年)に以下のようにある。「(這箇時期)寄贈、感懐与追念妓女の詩作大增、成為中唐士人写妓的主题、顯示士妓交往已由前期的隔隣遠觀、提昇到心靈交流的層次。(中略)和女妓交往主要是想獲取精神上的慰藉与解脫、並不想独佔某個名妓。因此、当時一些較有才情、交遊広闊的女妓、民妓或官妓、往往類似欧洲十八世紀時的交際花。」
- ㉕『三家評注李長吉歌詩』巻一。中華書局 1958年。
- なお宋本では「蘇小小歌」としているが、『全唐詩』では「蘇小小墓」に作り題下に「一作歌」と注記している。鈴木修次氏は「唐代における擬魏晋六朝詩の風潮」(『目加田誠博士古稀記念-中國文學論集』 龍溪書舎 一九七四年)で、「松柏」を墓地に植えられる樹である。後に李賀をはじめとする蘇小小墓を題材とする詩の創作にヒントを与えたのかもしれない、と指摘している。
- ㉖『唐才子伝校箋』巻六(中華書局 1990年)に以下のようにある。「祐字承吉、南陽人、来寓姑蘇。樂高尚、称処士。(中略)遂客淮南。杜牧時為度支使、極相善待、有贈云、何人得似張公子、千首詩輕万户侯。祐苦吟、妻孥每喚之、皆不応、曰、吾方口吻生華、豈恤汝輩乎。性愛山水、多遊名寺、如杭之靈隱・天竺、蘇之靈巖・楞伽、常之恵山・善權、潤之甘露・招隠、往往題詠唱絶。同時崔涯亦工詩、与祐齊名、顔自放行楽、或乘輿北里。每題詩倡肆、譽之則声価頓増、毀之則車馬掃跡。」(祐、字は承吉。南陽の人。姑蘇に来寓す。高尚を樂しみ、処士と称す。(中略)遂に淮南に客たり。杜牧、時に度支使と為る。極めて相い善く待す、贈ること有りて云う、何人が張公子に似ることを得んや、千首詩以て万户侯を軽んず、と。祐苦吟す、妻孥之を喚ぶ毎に、皆に應ぜず。曰う、吾方に口吻に華を生ず、豈に汝輩

を恤れまんや、と。性山水を愛す、多く名寺に遊ぶ、杭の靈隱・天竺、蘇の靈巖・楞伽、常の恵山・善権、潤の甘露・招隱の如きは、往往にして題詠して唱絶なり。同時に崔涯もまた詩に工なり、祐と名を齊しくし、顔る自ら放ちて行樂し、或いは輿に北里に乗ず。詩を倡肆に題する毎に、之を誉めば 則ち声価頓に増す、之を毀らば 則ち車馬跡を掃う。）

- 27 「張祐詩集校注」卷一 巴蜀書社 2007年。
 28 「張祐詩集校注」卷一 巴蜀書社 2007年。
 29 「三家評注李長吉歌詩」卷一。中華書局 1958年。
 30 「温飛卿詩集箋注」卷四 上海古籍出版社 中国古典文学叢書 1988年。
 31 「樂府詩集」卷八十一 中華書局1979年。
 32 「温飛卿詩集箋注」卷二 上海古籍出版社 中国古典文学叢書 1980年。
 33 張競『恋の中国文明史』筑摩書房、1993年 ページ107-108。

Transition of Suxiaoxiao's Literature Image — from Six Dynasties poetry to Tang poetry

PENG Lamei

Su was a hetaira of Southern Qi Dynasty in China's legend. There is no historical document about her left except a poem titled *Qiantangao's Suxiao song*, which belongs to *New Odes from the Jade Terrace*, a poem anthology of Six Dynasties. Many poems mentioned her from the beginning of middle of Tang Dynasty. Such a situation did not change in Song Dynasty. In Ming-Qing Dynasty, literators wrote operas and legend novels with her as the heroine. Until now, her tomb is still preserved on the shore of the West Lake in Hangzhou of China. Why are literators so enamoured of her? What is the meaning of Suxiaoxiao's existence in China's literature history?

This paper will focus on Suxiaoxiao's image in *Qiantangao's Suxiao song* and the transition of her image in the Tang poem. This paper will reveal the changing relationship between the literators of Tang Dynasty and prostitutes, the Suxiaoxiao's literature meaning, and its value in Tang Dynasty.